

まちの名に 歴史あり

問い合わせ 文化財事業団 (TEL 893・8111)

～ 森 ～



もり 森

この地域が「森」という大字で呼ばれるようになった時期は定かではありません。伝説では平安時代、石清水八幡宮から派遣された役人の森宮内小輔が、当時荒れていた須弥寺を再興したため、「無垢根」と呼ばれていたこの村を「森の村」と呼ぶようになったと伝わっています。

森地域は多くの小字があり、細かく分かれているのが特徴です。これには理由があり、江戸時代、この地域を治めていた山城国淀城主の永井家による年貢の取り立てが厳しかったため、村人たちは小字を多くし、田を細かく分け、収穫が少ないように見せたという言い伝えがあります。

須弥寺 「森」の集落



河内森駅付近の道路分岐点の写真(地図中の☆印)。上が現在、左は昭和30年代。

ごんでん ひらた ひろこだ 権田・平田・広子田

権田は河内磐船駅を含んだ南北にのびる場所で、「墾田」が地名の由来とされています。交野は石清水八幡宮の荘園があり、付田と呼ばれる田んぼを開墾する際に、拡張した田んぼが権田だと伝わっています。

また平田は、権田の東側に隣接し、岩船小学校と開智幼稚園の間にあたる場所です。扇状地から平地となる境目の土地で、現在は商業施設などが建っていますが、昔は少し傾斜がある水田地帯でした。

広子田は権田の南側、河内森駅から河内磐船駅に向かう道の東側にあたる地域です。「開田」から転じた地名と考えられています。権田、平田が開墾された後、一段高い斜面に開墾したと考えられます。

かがた 加賀田

加賀田は、森の集落付近から始まる扇状地が終わる平坦地に位置します。加賀とは、平坦地やすり鉢形の低地という意味があり、ここでは平坦地を意味した地名であると考えられます。

この地域は、夏の日照りが続くと水不足となり、江戸時代の中期以降、私市の池堂にある、ため池の水を加賀田へ引いていました。これを加賀田用水と呼び、森地域はそのお返しとして、私市に2斗5升(約37.5^{キロ})のお米を毎年納めていたそうです。

この用水は11月号で紹介した私部の官田にまで流れ、利用されていました。